

はじめに

2020 年 4 月

このリポジトリを構成する各ファイルについて、紹介しておきたい。

凡例 拓影表作成に当たって森田が用いた石刻拓影の目録記述の原則について、概説している。

碑名、著者、日付など、史料として石刻を扱う際の記述方法についての、一提案でもある。

略号表 拓影表中で使用している書籍の略号表であるが、日本国内で公開されている文献のかなりの割合をカバーしているので、拓影を含む文献の総合目録的性格を有する。具体的な所蔵状況については、CiNiiなどで検索していただきたい。

拓影表 これが表の本体である。個々の項目については、凡例を参照のこと。

東方 2019 - 9 東方書店刊行の『東方』2019 年 9 月号に掲載した、「「可見元朝石刻拓影目録」を編んで」の PDF である。広い範囲の中国（学）関係者にこの表を紹介するために書いたものである。本表の位置づけや意味について、あるいは森田の石刻利用についての考え方を述べているので、概説的な意味でアップした。最初にこれを読んでいただくのがいいかもしれない。（『東方』編集部了承済）

0903 南京報告 正式のタイトルは、「“地方志所収宋元遺文調査”から“可見拓影目録”まで—日本における元朝石刻史料環境」という。2009 年 3 月に南京大学で開かれた「東亜史及其史料研究：中日高校第四次学術交流会」でおこなった講演で、本来はその時に刊行された同名の冊子からアップすべきものだが、PDF がないので、中国語訳作成のために先方に送ったワード原稿を PDF にしてアップした。昨今の情勢から、冊子との対校をおこなえていないので、情勢が安定したら改訂する必要があるかもしれない。なぜこれを今回アップしたかという、この講演は、2006 年に『アジア遊学』91 号に書いた、「「石刻熱」から 20 年」と対となるもので、内容はかなり重複するものの、『アジア遊学』の方がやや客観的に、こちらは主観的に、日本における 1980 年代から 2000 年代にかけての元朝石刻研究の変化、展開を述べたものであり、森田が「拓影表」を作るようになった背景を理解していただくのに役に立つかと思ったからである。さらに、この冊子は公共機関での所蔵が皆無で、関係者以外にはほとんど目にふれていないと思われることもアップした理由の 1 つである。なお、「石刻熱」から 20 年」についても、『アジア遊学』編集部の許可はすでにいただいているので、こちらには、その後の追加事項を補訂した上で、同じくアップしたいと考えている。

追記

奈良大学図書館リポジトリには、この拓影表に関連する項目がいくつかある。

13, 14 世紀東アジア史料通信

森田が編集者となって、関係した科学研究費のメンバーなどに協力をいただいて刊行した、研究・情報誌である。対象の時期の史料について、論文のほか、調査報告、新刊情報なども載せているので、機会があれば見ていただきたい。同じく、教員著書＞森田憲司の下にある。

森田憲司著作目録（『奈良史学』34号）

2016年までを対象としたものであるが、森田の書いたものを、コラムまですべてを年代順に並べている。当然、石刻関係の仕事も含んでいるし、コラムなどで石刻にふれているものも多いので、関心を持たれた方は見ていただきたい。『奈良史学』は、このリポジトリの文学部の下にある。また、同誌34号以降は、大学HPの「史学科からのおしらせ」からも見ることができる。